

我々の郷中教育

園長 児嶋 草次郎

3月に入ってすぐ本格的な雨が降って、大自然が一斉に目覚めて動き始めています。蛙の声も聞こえますし、花桃が元気よく咲き始め、静養館や方舟館周辺では、ジンチョウゲの強い香りが漂っていて、散歩するたびに癒されています。ちなみにこの花桃やジンチョウゲは、花を咲かせたり匂いを発するのには相当のエネルギーを使うので、寿命はほぼ20年前後です。ですから、花桃は数年おきに苗木を植え、ジンチョウゲは毎年挿し木をして苗を少しずつでも育て植えておかないと、いつの間にか庭から姿を消してしまいます。

さて、2月から3月は忙しいシーズンです。新年度へ向けて、事業計画や人事のことを考え、また園長たちや職員たちとの面談も入れていかねばならず、この人材難の時代、頭は混乱します。しかし、『何とかなる』と常に自分に言い聞かせながら、楽観的に対応しています。今回は、じっくり考える余裕もありませんので、この2月の二つの行事を思いつくままに書かせていただきます。

2月7日(土)から8日(日)にかけて、鹿児島に「郷中旅行」に行つて来ました。「郷中」とは、薩摩藩が武士の住居約50戸くらいを単位として作った組織で、西郷隆盛は、市内の「下加治屋町(約70戸)郷中」の中で育ちました。年長になると自らリーダー「二才(にせ)」となり、後輩たちを育てています。

この「郷中旅行」について、中・高生の子供たち、職員合わせて25人で学ぶ旅でした。3年に1度は行くようにしていますので、中・高6年間園で生活する子供は、2回は行くことになります。この「友愛通信」にももう何度も書いて来ました。しかし時代も子供たち、職員たちも年々変わってきますので、やはり、そのつどまとめておく必要性を感じます。

友愛園を朝6時50分すぎに貸切りバスで出発し、まず、知覧の「特攻平和会館」をめざします。今、世界各地が第二次世界大戦前夜のような雰囲気になって来ており、『戦争は絶対ダメ』という感性を養っておくことは、日本人の責任でしょう。最近はただ資料を見るだけでなく、講話も必ず聞くようにしています。生の声を聞くことでより心に残るからです。

昼過ぎに鹿児島市内の「西郷南州顕彰館」へ行き、ここでも、館の女性職員から「郷中教育」についての講話を聞き、同じ敷地内にある隆盛等のお墓参りもしました。女性職員は学芸員でしょうか、かなり専門的な話をわかりやすくしてくださいました。

それから西郷の終焉の地、城山に登り、西郷の主(あるじ)と言ってより島津斉彬(なりあきら)を祭る照国神社を参拝してホテルに入りました。夕方頃から冷たい小雨が降り出し、次の朝は雪に変わっていました。あの西南戦争の朝もこんな天気だったと思います。ホテルの窓から見下すと、子供たちは朝早くから外に出てはしゃいでいました。

2月8日は、午前中に吉野町の「南洲翁開墾地遺跡」を訪れる予定でしたが、雪が本格的となり、現地までは行きましたが、10cm近く積もっていて、とても運動靴で歩けるような状況ではありませんでしたので、そのまま市内に引き返しました。雪の降りしきる西郷銅像前でみんなで記念写真を撮っ

て、そのままグループごとに解散して街中に買物に出かけました。昼過ぎに中央駅北側に集合し、家路につきました。

ここからは私の感想です。「郷中教育」は、友愛園の教育の模範です。一言で言えば、先輩たちの率先垂範によって下級生たちを導いていく教育です。西郷の育った下加治屋町からは、大久保利通、大山巖、東郷平八郎など、多くの偉人を輩出しています。おそらく西郷さんがいたからその教育が成功したということなのでしょう。私は、形骸化すればいじめの温床になるだろうとも思っています。実際、この郷中教育を否定的に見ている学者の本も読んだことがあります。個人主義、人権主義の世の中になって、この集団の力動をうまく使う教育はむつかしくなっていますが、私は日本の教育文化（切磋琢磨・共生）として、この友愛園の生活に生かしていきたいと願っています。

今回、子供たちが得た言葉で新鮮に感じたのは、「山坂達者」とか「詮議（せんぎ）」という言葉でしょう。「山坂達者」は、心身を鍛えるための鍛錬です。示現流の剣術の稽古をしたり、野原を駆け回ったりしました。友愛園で言えば、野球やバレーボールなどのスポーツをしたり、労作に取り組んだりすることになります。「詮議」とは、先輩たちどうし議論し合うことです。郷中掟の中に「何事も議論を尽くせ、決まったら議を言うな、言い訳をするな」とあるとか。こういう所は、今の子供たちは弱く、グチや不満がいつまでも残ってしまいます。互いに危機意識が薄く、世の中がそれだけ平和だということなのでしょう。

子供たちの感想もいくつかあげておきます。

「これからは、歳下の子達の見本となれるよう、けじめある生活をしていこうと思いました。西郷隆盛の教えである、自分に負けないという言葉に胸に刻んで生活していこうと思いました。」 なな(中3)

「将来家族みんなで楽しく生活するため、国家資格取得を目指して、勉強や生活態度を見直して、何ごとに対してもプラス思考に考えて下級生の模範となれるような行動をしていきます。」 みひろ(高1)

「この教育は学力、体力だけでなく、人間力を養う場でもあるので、自分の感情のままに動かず、自分のプラスになるような行動を心がけようと思いました。」 ももか(高2)

「上級生として下級生についてきてもらうためにも、郷中教育の教え『負けるな』、『嘘を言うな』、『弱い者をいじめるな』を特に意識して生活していきたい。」 さく(中3)

この研修における、私自身の新たな発見を二点あげておきます。

①顕彰館に置いてあった1枚の「第5回西郷南洲翁にまつわるエピソード(令和2年度春夏号)」と見出しのついた資料の中に書いてありました。「吉野開墾社」に関することです。今回雪のためにみんなでその開墾地に立つことはできませんでしたが、私は石井十次にとって、この地が労作教育の原点であると思っています。詳しいことは以前にこの通信に書いたことがあり省略させていただきます。明治時代、農業も「殖産興業」における重要な柱でした。「西郷南洲翁が高邁遠大なる農業政策の具現化のための第一歩として情熱を注いだ道場で、明治8年4月に設立されました。」と、その1枚の資料に記されてあります。昼間は吉野村の原野を開墾し、夜は青年たちは学問に励みました。もちろん西郷隆盛も“師弟同行”したのですが、次のようなエピソードが載っていました。

「開墾の畑地肥料に使用する人糞を民家に汲み取りに行くことだけは流石(さすが)の私学校黨(とう)もきまりが悪く、傭人(やといにん)を使用していたが、先生(南洲翁)自ら馬を曳いて鹿児島市内を往復せられたので、これ以来皆馬を曳いて人糞を汲み取りに行くようになった。先生の無言の教訓であった。」

つまり、郷中教育がそうであったように、この私学校の労作も、“率先垂範”が命であったのです。
②奈良時代前期、律令体制が確立すると、日本全国の国に国府が置かれ、中央から国司と呼ばれる役人が派遣されるようになりました。日向国の国府は西都市妻にあったことは、多くの皆さんが知っておられます。国府と国府をつなぐ道が官道（言わば国道）です。

豊後（大分）から日向国の国府に通じる道は、都農方面から木城（高城）へ抜け、椎木坂を登ってこの茶臼原を通り、妻へと下って行きました。私たちが今住んでいる目の前を通っていたのです。名称は「薩摩往還」と呼ばれていました。石井十次の日誌の中でもそういう呼び方が出て来た気がします。ここは薩摩でもないのに、なぜそう呼ぶのか、私にとっては少々不満でした。それが、今回この郷中旅行中、鹿児島市内で手に入れた本によって解明されたのです。その本の中に日向国府から大隅国府、薩摩国府への道が試案として地図上に示してあったのです（「隼人の古代史」中村明蔵）。薩摩は昔からクマソとか蔑称されるように未開の地とされ、国府が置かれたのは日向や肥後よりも遅れ、官道はこちらから伸びていったものなのでしょう。つまり、「薩摩往還」とは、薩摩地方と行き来するための道だったのです。これも私にとっては新発見です。いかに重要な道であったかが分かります。

2月22日（日）、私たちは子供たちと一緒に、川南町の運動公園まで約20km歩きました。「郷中教育」で言えば山坂達者です。「薩摩往還」時代にかえるならば、この官道を20K登ることにもなります。途中、川南の「宗麟原供養塔」にも立ち寄りました。「友愛通信」2月号で取りあげました、九州の関ヶ原の戦い（高城合戦、根白坂合戦）をなぞる形にもなりました。20K歩くのは小4以上です。グループに分けて、それぞれに担当職員が引率します。小1・2・3は、供養塔から約半分歩きます。これについても以前、友愛通信で書いたことがあります。事の始まりは、災害に強い子供たちを育てておきたいという思いでした。歴史がからんでくると、その目的もどんどん複雑になっていきます。体で自ら育った大地の歴史をおぼえること、これはアイデンティティの形成にとって重要なエネルギーとなります。

朝8時20分すぎに、グループごとに、何分かおきに出発。私はいつものように最後尾を一人で歩きました。体調は万全でした。

まず、のゆり幼稚園の前を通って、根白坂（椎木坂）へ向かいます。のゆり幼稚園を新築した時（2020年）、小さな祠（ほこら）を建物の北東の場所（鬼門）に作りました。この場所をしっかり確認して行くように皆に指示しましたが、前を歩くグループを見ていると、あまり関心はなさそうでした。高城合戦（1578年）と根白坂合戦（1587年）とを混同してしまっている人も多いのですが、この小さな祠は、根白坂合戦で亡くなった若者たちを弔うためのものです。一方川南の宗麟原供養塔は、高城合戦で亡くなった人々を弔うためのものです。後の根白坂合戦の戦死者を供養するものは今までありませんでした。私たちにはお金はあまりありませんので小さなものしか作れませんでした。価値は川南のものの変りないと私は思っております。

私は石井十次の思いを勝手に想像したりしています。この地に理想郷を作ることが彼らの魂を慰霊・供養するだけではなく、ここで教育を受ける子供たちが、無念の思いで亡くなった若者たちの魂から、未来へ向けての熱いエネルギーを得ることができるのではないかと、今回そこまで私は妄想を広げて来ています。

椎木坂（根白坂）の上に立てられた案内板の前で、子供たちはクイズに向き合っていました。今NHK大河ドラマ「豊臣兄弟」を放映中で、歴史好きの人たちにとっては興味ある場所になるのですが、残念ながら時の流れの中で風化してしまっています。交通量も多く危険ですので、私たちはもう一本東側の坂道を下りました。平和な木城の町の通りを抜けて役場前の小丸川橋を渡り、城山下のT字路

を右折して、「高城川合戦古戦場跡」と書かれた看板の方角へ歩きます。このあたりは、南九州のヘソと言ってもよいのかもしれませんが。山内正徳氏の「高城戦記」に次のように書かれていたのをしっかり覚えています。

「高城を制するものは南九州を制するとまで言われていた」。

台地の方から舌状に伸びた山城がここにあり、高城合戦の時も根白坂合戦の時も、薩摩はこの城を必死に守ろうとしました。

小丸川（高城川）支流の切原川の橋のところに、案内板が立てられていて、子供たちはまた立ち止まって読んでいました。これから少し下のダケキガ淵が激戦地で、淵は血の色に染まったとか。

私たちは川南台地へ登り右に曲って宗麟原供養塔に到着。巨大な五輪塔が立ち、それを木造の屋根がおおい守っています。今から 450 年近い前の戦いですが、7000 人の戦死者の魂の慰霊碑として、大事にして来た先人たちへの感謝が沸き起こりました。備え付けの線香をあげ、芳名録に記入もさせていただきました。

元気のありあまっているグループは先々に歩いていきましたが、私は、年少児の子供たちと一緒に昼食弁当を開いて食べました。

今これは、それから 1 週間以上たって書いています。ロシアのウクライナ侵略が 4 年たつのに全く収束の兆（きざし）さえ見えない状況の中で、今度はアメリカとイスラエルがイラン爆撃を突然に始め、最高指導者ハメネイ氏等国のリーダーたち何人もを殺害し、戦争状態に入っています。小学校の児童も多数亡くなったとか。先ほど「世界各地が第二次世界大戦前夜のような雰囲気」と書きましたが、私は戦後に生まれた人間ですので戦争を知りません。これから日本が戦争に巻き込まれないようにするために、何をしたらよいのでしょうか。ゲームではない、自分達の身の回りでも、このように多くの命を奪い合うような戦争が行われて来たという歴史的事件を、一つ一つ子供たちが感性の次元で覚えて、イマジネーションを働かすことのできるような人間に育てておくことが、私たち大人の使命ではないか、そうも感じます。

川南台地にあがると、左に尾鈴の山並を見つめながら、ひたすら歩く、そんな進行となります。戦いに敗れた敗残兵たちはどんな思いでこの道を歩いたのでしょ。特攻隊の若者たちが家族のことを思い飛んでいったのと同じように、一人ひとりが、自分の家族・親族を頭の中に描きながら必死に走りまた歩いたことでは。

私の前は、体力のない小学生女兒グループが歩いていましたが、だれ一人ぐずる者なく、目的地川南運動公園に到着。1 時 10 分頃でした。公園内はサッカー場で競技が行われていたり、遊具で多くの家族が遊んでいたり、平和そのものでした。

しかし、この地球上において、平和が永遠に続くなんて思いこんではいけないのだと自戒しなければなりません。

地球のプレートの上に乗っかっている日本、縄文時代以前から繰返し、火山の爆発、地震、津波に襲われて来た日本人、生死を重ねる中で、集団生活や協力をし合える性格の DNA を持つ人々が主に生き残って来たとか。あの大战は西洋人のマネをして悲惨な結末を迎えることになりましたが、自分たちの宿命を自覚しながら、殺し合いのない共生し合える社会を維持して行ってほしいと願います。

歩き終えた子供たちは皆はつらつと公園内で遊び、園のマイクロバスで無事に帰って来ました。